

万葉びとを襲った神病

えやみ

堀尾 眞紀子

(文化学園大学名誉教授・美術史研究者)

コロナ禍による外出自粛で経済はもちろんだが、文化芸術もすっかり息を潜めていて寂しい。担当している成人学級や市民大学のうち、五年目に入る万葉講座が幸い六月から再開される目処がたち準備にいそしんでいる。このパンデミックを予想だにできなかった一昨年の講座の折り、万葉の人々にとって下紐、つまり下着の紐は貞操帯の意味合いもあったという話の中で、次の歌を紹介した。

物思ふと人には見えじ下紐の

下ゆ恋ふるに月そ経にける

(巻十五―三七〇八)

そしてこれは遣新羅使の大使、阿倍あべのつぎまろ継麿の歌であること、新羅へ渡った帰路、疫病に襲われ、無念のうちに対馬で没したこと、当時大流行した鬼病、天然痘がいかに恐ろしいものだったかを「千三百年も昔のことですが：」と話した。

ところが何と！この二ヶ月ほど後、思いもしなかったコロナの流行が始まったのだ。まるで大昔の疫病の目を覚まさせて呼び寄せてしまったような心苦しさに、思わず皆さんに謝った。

阿倍継麿は身分高い貴族、聖武天皇の命により天平八年、多くの随員を引き連れ六月、大阪難波の港を出発している。当時の航海は大きな

危険を伴い、途中で海の藻屑になった者も数多い。新羅への大使着任以来、彼は内心悶々として多くの切々とした歌を残している。先の歌の意、「物思いに沈んでいるとは人には知られない。しかし下紐のように下心に妻を恋い焦がれているうちに月日も経ったことだ」。弱音は吐けない大使ゆえの慟哭がうかがえる。

万葉集の巻一五には、この遣新羅使にかかわ

堀尾眞紀子（ほりお・まきこ）



東京芸術大学美術学部大学院修了。フランス国立パリ工芸大学留学。奈良県立万葉文化館運営委員、万葉古代学研究所客

員研究員等を歴任。主な著書に『画家たちの原風景』（第三五回日本エッセイスト・クラブ賞受賞、NHK出版）、『フリーダ・カロー』（中央公論社）、『絵筆は語る』（清流出版）、『女性画家 10の叫び』（岩波書店）ほか。

る歌が一四五首収録されており、その一首目。

武庫むこの浦の 入江の洲鳥すどり 羽ぐくもる

君を離れて 恋に死ぬべし

（巻一五―三五七八）

「武庫の浦の入江の洲鳥がひなをはぐくむように私を大事にしてくださいとあなたと離れたら、私は恋しくて死んでしまうでしょう」。

波の上に浮き寝せし夜あど思へか

心悲しく夢に見えつる

（巻一五―三六三九）

「波の上に漂って寝た夜に、どうしたことだろうか心悲しげな妻の姿が夢に見えたことよ」。

一行に雪連宅満ゆきのむらじまかまるという占い師がいた。その日の天候や風を読みながら航海の無事を占い、先導する役目の人であった。大嵐に遭い船が中津の海岸に流され、九死に一生を得て安堵した時の歌がある。「題詞」に「旅のあまりの辛さに嘆き悲しんで作った歌八首のうちの一首」とある。

大君の命恐み大船の

行きのまにまに宿りするかも

「大君の命令を尊んで、大船の進み行くままに旅の宿りを続けてまいります」。真意は、命令に従わざるを得なくつて、あまりに辛い厳しい船旅に振り回されていることよ、だろうか。

何度かの暴風雨を踏み越えながらの航海は予定よりも大幅な遅れをうみ、何とか博多湾入港時、すでに季節は秋となっていた。ここで大宰府の役人への表敬訪問を行ったが、実はここ大宰府ではこの時、天然痘が流行していた。遣新羅使のうちの何人かが罹患し、宅満もその一人。再び船に乗り込んで出航した彼らだったが新羅へ向けて壱岐島にたどりついた時、すでに病がすっかり重くなっていた宅満は息をひきとる。

岩田野に宿りする君 いへびと 家人の

いづらと吾れを問はば いかには言はむ

(卷一五—三六八九)

岩田野とは隠岐の島南岸、その岩場に葬られた宅満に手を合わせ仲間が詠んだ歌。「家で待っている家族に、あの人はどうしたの？どこにいるの？と聞かれたら、何と答えたらよいのか」。

一方、帰路に対馬で亡くなった繼磨は大使、つまりトップであったが、帰還の折は死者が多く混乱していたのか、悼む歌も残されていない。残るのは出立の時と、往路の歌がほとんどで、帰路に詠まれた歌は五首のみである。多くの使節団員のうち半数以下しか戻れなかったという資料もある。

繼磨の死後、残された遣新羅使がやつとのことで平城京に戻るとたちまち天然痘が蔓延、当時の日本の総人口の約三割にあたる一〇〇万から一五〇万人が亡くなったといわれている。

当時の政府がこの事態にどう対応したかの記録が残っている。朝廷から国司に、予防と治療に関する情報を書面で伝達、百姓に伝えるよう命令。その際、迅速化を図るため必要な印の数を減らしている。薬、米の配布、租庸調の調の減免、また疫病のモニタリング制度導入など。奈良時代は現代の私たちが考えているよりずっと政府が機能していたようだ。また聖武天皇は「この疫病は自分の不徳の致すところ」と深く責任を感じ、仏教に更に帰依するため、東大寺建立、大仏造営、全国に国分寺が建立されるこ

ととなる。七四三年には、衰退した農業振興のため墾田永年私財法を制定し、農地の私有化が図られた。

しばしば襲って来て家族や親しい人をさらっていく疫病は、昔の人々にとって恐ろしい事の上なく、まさに鬼の仕業と映ったことだろう。厄払いのための鬼やらい、門口に鯛の頭と柁の葉、茅の輪くぐり、夏祭、隅田川の花火などの行事が今に伝わっている。疫病は日本の暮らしにこれだけ身近だったことを思い知らされる。その恐ろしさを、今回のコロナ禍で感染者が続出するまで、私たちは忘れていたようだ。